第39回 特別対談企画

「感謝の心」が人の心を大きく、美しく、若く、そして強くする。

プロゴルファー
古市 忠夫 氏

早いものであれから27年です。死者約6400人、負傷者約4万人、家屋全壊約10万4000軒、同半壊約13万7000軒、同全焼約7000軒。未曾有の大災害、阪神・淡路大震災が発生したのは1995(平成7)年1月17日でした。同日早朝、震源地から遠く離れた石川県でも震度3の揺れがあり、今も記憶している方は少なくないでしょう。遅い夜明けを迎え、外が白みだすと神戸やその周辺都市の惨状が次々とテレビに映し出され、言葉を失いました。

今回、対談をお願いしたのはプロゴルファーの古市忠夫さんです。古市さんは同震災の被災者で、ご自宅は被害が甚大だった神戸市長田区です。当時はまだプロゴルファーでなく、地元消防団の副分団長も務めるカメラ販売店のご主人でした。それが一念発起して、2000(平成12)年に59歳11カ月で日本プロゴルフ協会のプロテストに合格。「還暦ルーキー」として大きな話題をさらいました。深い痛手を負ったまちの復興に取り組みながら自身の心をどう励まし、60歳目前でプロになる夢を実現させたのか、聞きました。

早朝に地鳴り、甚大な被害に

畠 本日はお時間をとっていただきありがとうございました。古市さんは1995(平成7)年の阪神・淡路大震災を経験し、地域の復興に尽力するとともに、個人でもプロゴルファーになる夢を5年後に現実としています。今回、古市さんに対談をお願いしたのは、コロナ禍のピンチから我々はどう立ち直ればいいか、ヒントを古市さんの体験やご経験からいただけたらと考えたからです。

古市 畠さんがおっしゃったような質問は今まで、何度となく受けてきました。

畠 そうでしょう。

古市 ただ、そうした問いかけに僕の答える内容と、皆さんが期待される答えにミスマッチがあることをあらかじめご承知おきください。

畠 かしこまりました。

古市 ほとんどの方は、私に才能があって努力をしたからプロゴルファーになれたと考えがちです。さらに言えば、運もそこに加えます。「人生で成功するには才能と努力と運が必要」だと。講演などでもよくこの点から質問されます。

畠 ストーリーとしてはきれいですしね。

古市 実は僕も、震災前には「才能だ、努力だ、運だ」と思っていた一人です。でも、この写真を見てください。

畠 (震災直後の写真を見ながら)これはひどいですね。なんというか、まさに地獄絵図ですね。

古市 原爆が落ちたような光景でした。そんな状態に遭遇すると、人間がどんな表情に変わるのか、これを見てください。

畠 ん、これは古市さんですか…?

古市 そうです。目が死んでいるし、表情もない。私の場合、家族は全員無事だったのですが、自宅も経営していたカメラ店も結局焼失しました。それで意気消沈し、こんな顔になったのです。

畠 地震発生時のことを少し教えてください。

古市 早朝の5時台でしたので、まだ寝ていました。で、グオオ

オーッというものすごい地鳴りが響いて、目が覚めました。

畠 揺れは?

古市 地鳴りが先でしたね。その後にドォーンと。直下型です。

畠 ご自宅はどのような状態に。

古市 家の中は、タンスやら何やらほとんどの物が倒れており、壁も剥がれていましたが、建物は崩れることなく、隣で寝ていた妻も2階にいた長女、次女もなんとか無事でした。家の近くに公園があったので、3人には「今から向こうの公園に避難せい!俺は救助と消火に回るから」と言って、ヘルメットとジャンパーを身につけ、家を飛び出しました。

救助活動やまちの復興に全力

畠 地元の消防団の副分団長も当時、務めていたんですよね。

古市 2日間で11人を救助できました。でも、救助活動の中では倒壊した家屋の下から圧死した子どもの遺体も収容し、辛かったですね。

専門用語でトリアージ(識別救急)というのですが、僕たちが11人救えたのは、優先順位をつけたからです。マンパワーも機材も限られており、がれきの中からなるべく短時間で救出できそうな生存者を優先しました。たとえ親しい人がいる家が倒壊していても、救出作業に時間を要しそうな場合は、非情ですが後回しにしました。

畠 優先順位ですか。心を鬼にしないとできませんよね。

古市さんの著作などによると、自宅と店を失った一方で、駐車場に止めてあった愛車のスカイラインが幸運にも被害を免れ、トランクにしまってあっ

たゴルフバックを目にしたときに、「これからの人生、お前はこれでいけ」と天啓があったと振り返っています。そのことがきっかけで、のちにプロゴルファーになったと。

古市 大筋では間違いではないのですが、4~5回、ひどい時は昼から始めて夜の11時まで続けました。

「おまえは行政のまわし者か」とみんなから怒号や罵声を浴び、ひどく落ち込んだこともあります。脅迫電話がかかってきたこともありますね。そんな状況下で、プロテストなんか考えられません。

畠 では、プロゴルファーになろうと思ったのは、何年くらい後だったのでしょうか。

古市 震災の2年半後くらいです。区画整理が進み、1997(平成9)年の6月から自宅の再建工事が始まりました。その工事を頼んだ友達が、何を思ったか僕に「プロテストを受けてみろよ」と言い出したんです。

59歳11カ月でプロテスト合格

畠 突然ですね。古市さんがアマチュアとしてはけっこうな腕前だったということはもちろんご存知だったのでしょうけど。

古市 それで、ぐらぐらっときたのです。「震災後練習をしていないし、プロテストを受けろと簡単に言うけど、そんなの通るわけがない」とそのときは否定したのです。

畠 初めてプロテストを受けたのはいつですか。

古市 1回目は58歳のときです。1999(平成11)年、2回目が2000(平成12)年の9月15日ですね。

畠 この2回目で古市さんは合格したのですね。

古市 そうです。

畠 年齢は59歳?

古市 正確には59歳11カ月24日です。

畠 じゃあ、ほぼ60歳ですね。

古市 誕生日の1週間前に合格した格好です。

畠 プロゴルファーの試験は年齢的には何歳まで受けられるのですか。

古市 上限はありません。何歳でもいいのです。

畠 え、何歳でも?

古市 1999年にプロテストに合格した霍本謙一さんは、史上最年長記録の63歳10カ月でした。私の記録はその次にあたります。

畠 ふと思ったのですが、プロゴルファーになる前、収入はどうやって得ていたのですか。カメラ店を建て直したのですか。

古市 店の再建はしていません。何で生活ができたかというと、バイクで工事現場の撮影済みフィルムを集めて現像に出す仕事をしていたからです。

畠 デジタルカメラが普及している今と違って、写真を撮るとフィルムの現像とプリントが不可欠な時代でした。でも、住む人も少ないから被災地でそんな需要があったのですか。

古市 工事関係ですね。特にインフラの復興工事の。道路、水道、下水、電気、ガスの修復があちこちで行われ、各現場で記録用の写真が何枚も撮られていました。その写真フィルムをもらいに回って、現像所に現像処理に出すわけです。この仕事は紹介などいろんな人に助けていただき、もう毎日毎日感謝でした。

また、がれきの除去などでも多くのボランティアの皆さんにお手伝いいただき、とにかくありがたかったですね。

「ありがとう」を心の中で繰り返す

畠 古市さんの著作を見ていたら、「ありがとう」という言葉が何度も何度も出てきます。謙虚さにあふれた方だなと、行間からもうかがえます。そんな謙虚さがあるから、プロになる夢を達成できたのかなと思います。

古市 震災を境に、物事の考え方がものすごく変わりましたね。震災前、私は成功するには

ふるいちただお。1940年兵庫県神戸市生まれ。立命館大学経済学部卒。59歳だった2000年に、史上2番目に高い年齢で日本ゴルフ協会(PGA)主催のプロテストに合格するとともに、同協会のゴルフインストラクター資格を史上最年長で取得した。『60歳からのティーショット』(日本放送出版協会)、『ゴルフは心の格闘技』(ゴルフダイジェスト社)、『「ありがとう」のゴルフ−感謝の気持ちで強くなる、壁を破る』(ゴルフダイジェスト新書)、『飛ばしを諦めたらアカン!!』(ベースボール・マガジン社)、『もう一度立ち上がり、前を向くために、伝えておきたい』(ゴルフダイジェスト社)などの著書がある。

才能、努力、運が必要だと考えるタイプの人間でした。人の3倍努力をしたら夢は叶えられる、商売で利益を得たかったら人の3倍働け、プロゴルファーになりたかったら人の3倍練習しろという。

畠 それが普通でしょうね。

古市 でも震災後は、物、金、名声、地位はそんなに重要ではない。大事なのは、人を思いやる、いたわる、感謝、友情、積極性、勇気だと思うようになりました。もう一回言います。大事なものは、人を思いやる、いたわる、感謝、友情、積極性、勇気です。

畠 当然、そうなった理由があるわけですよね。

古市 区画整理事業の際に「おまえは行政のまわし者か」と面罵され、やる気をなくしていたとき、たまたま聴いていたラジオから、こんな言葉が流れてきました。「金銭を失うことは小さなことを失うことである。信頼・信用を失うということは大きなことを失うことである。しかし、勇気を失うことはすべてを失うことである」。グサッと胸に突き刺さりました。それから勇気について考えました。

畠 勇気とはなんぞや、ですか。

古市 私は何事にも屈しない人が勇気ある人だと思っていました。頑張って、頑張って、挫折しない。しかし、震災後の私は、頑張れることに感謝できることがより大切だと実感するように変わっていました。

積極心を持つことプラス、感謝です。この二つを併せ持つ人物こそが誠の勇者、本当の勇気を持つ人間だと思います。自分の力はちっぽけで、多くの皆さんに助けていただけるから、難問にも取り組める。

「ありがとう、ありがとう」という感謝の気持ちがどんどん体から湧いてきます。

畠 青春ですね。

古市 毎日が青春です。だからときめいている。老いることが楽しいというか、こんな人生が81歳で迎えられた。僕、ネタ帳書いているんです。79歳半ばから、大学ノートに書いています。天国からの手紙のようなもので、俺が死んでから子どもや孫が見る。サブタイトルは「天の声」です。そこには、今、言うようなことを全部書いているのです。面白いですよ。楽しいです。

畠 先ほどの話に戻ります。地震の前までは、ゴルフは月に1回くらいやっていたのですか。

古市 ゴルフを始めたのは30歳からです。お金がないから、素振りやランニングばかりしてうまくなった。神戸市内にあるパブリックの安いコースに朝早く行って練習し、その後、店に行きました。そして39歳かな、子どもが大きくなって、少し生活も楽になってきたところで会員権を買って、月2回行くようになったのです。

畠 センスがあったのでしょうか。

古市 僕ぐらいのセンスは、皆さん、なんぼでもありました。僕が特別だったわけではないです。

畠 通常、プロテストには何人くらいが受けるのですか。

古市 僕が合格した年は1800人くらいでした。

畠 すごいですね。

古市 才能とか努力で片づけられるような話ではありません。プラス何かがないとこんな奇跡は起きないと自分でも思っています。

感謝の心で他者のために尽くそう

畠 すると、精神力ですかね。

古市 そう。精神力。言い換えると、心技体の「心」ですよね。僕は60直前でプロゴルファーになれました。いわば、奇跡を起こしたわけです。そして、奇跡には方程式があると考えています。

「才能+努力」、もしくは「才能×努力」はよく目にするポピュラーな表現で、これに「+運」「×運」を加えるパターンも見かけます。でも、僕は誰もが持っているものなので、僕はここに感謝を付け足します。「才能×努力×感謝力」です。

畠 「感謝力」ですか。この古市さんの述べる感謝に一番近い言葉は「徳」だと感じます。

古市 報徳の「徳」ですね。

畠 そうです。「徳」という字は、ぎょうにんべんに十四の心と書きます。その内訳には親切な心、感謝の心などがあります。古市さんには感謝の心を中心とする徳が備わっていると言えるでしょう。

古市 畠さんは徳と表現されたのですが、そのようなパワーがあることは、本当にわかります。僕はここ(対談場所となった旭若松公会堂)のトイレ掃除を週1回、12~13年くらいしています。

畠 ほう、古市さんが。

古市 「ありがとう」「ありがとう」と心の中で感謝の言葉を繰り返しながらやっています。何かがある。ほんまにそう信じています。朝は、今朝もしてきましたが、通学路で7時40分くらいから旗を振っています。

畠 学童の登校時の見守りボランティアですね。

古市 子どもたちが交差点の横断歩道を渡る際に、横断旗を振っています。また、通学路の一部がガード下にあり、犬の糞やペットボトルやらが放ってあってものすごく汚いので、通学路の清掃もしています。

畠 いずこも同じですね。

古市 トイレ掃除と見守りボランティア、通学路清掃は、死ぬまでさせてもらいたいなと思っています。「ありがとう」「ありがとう」と。すると、いいことしか起きない。

畠 そうですね。循環です。善の循環。コロナが収束した後、住みよい日本を作っていくのは政府の仕事かもしれませんが、そこで我々個々人が何を求めて、何をしたらいいのか、古市さんのお話を聞きながら、少しわかった気がします。

やはり、徳を積むということですね。自分のできることを、一生懸命、見返りを要求せずにやる。自分のできることを一人ひとりがやっていけば、明るい未来が続くということではないでしょうか。

古市 そうだと思います。

畠 古市さんの今後ますますのご活躍に期待しております。本日はありがとうございました。

古市 こちらこそ、ありがとうございました。